

# ようこそ、食べ物が生まれる国へ

私たち消費者がふだん触れる農業は「問題」や「課題」としてマスコミが伝える報道か、あるいはその逆で「ユートピア」として謳い上げるかのどちらか。

柴田監督が「百姓国」に通い詰めることでベールをひらいて見せてくれる世界は「力強く」「工夫に富んで」「学ぶことだらけ」のワンダーランド。

監督の案内で「百姓国」へ一緒に旅してみませんか。(エル・コープたね部)



生活クラブ京都エル・コープ 映画上映会

**3月23日 (日) 京エコロジーセンター シアター**

受付開始 13:00 ~

上映時間 13:15 ~ 15:30

終了時間 16:30 上映終了後、参加者交流会を行います

【参加申込】定員50名 先着順  
075-606-7360 (担当: 奥田)

<https://x.gd/AJ0kL>

【参加費】  
・生活クラブ京都エル・コープ組合員とのお友達 500円  
・一般1000円 (当日加入で500円) ・中学生以下無料  
お支払いは釣銭のいらないよう、ご準備ください。





食べている限り、誰の隣にも「農」はある。

なのにどうして、これほど「農」の世界は私たちから遠いのか。これは自然と向き合い、作物を熟知する百姓たちの叡智を訪ねたドキュメンタリー。食卓の向こう側にいる「耕す人々」の世界の入り口が、ここにある。



©プロダクション・エイシア



©プロダクション・エイシア

僕は大学時代に1年休学し、山村で農家の手伝いをしながら、古者たちの人生の聞き書きをして過ごしました。そんな僕にとって、農への理解を「点」から「面」として深めていくことは30年来の夢でした。ドキュメンタリー映画『百姓の百の声』は、4年をかけ全国の農家を訪ねました。

映画のタイトルに「百姓」という言葉を使っていますが、実は、「百姓」は放送禁止用語になっています。その背景には、農業に対して近代の日本人が抱いてきた、ぬぐいがたい差別意識のようなものが横たわっていると感じています。辛そう、泥まみれ、儲からない、肉体労働…みたいな、農業や漁業の方々へのどこか蔑んだ視点。

「農家は厳しい、辛い、かわいそうな人たち」——多くの日本人にはこの感覚がどこか深層心理のようにあるのではないのでしょうか。それは、明治以降の近代化や、戦後の高度成長の中で、都市的・工業的なものこそが

価値あるものと見えるよう、教育もメディアも少しずつ醸成しつづけてきた意識なのだと思います。(中略)取材をさせてもらったコメ農家、横田修一さんは言います。

「農家っていうと“可哀そうな人”“弱い人”という目線でメディアに載ったり政策議論されることがほとんどだけど、実際はそうじゃない。僕は「百姓」という言葉が大好きだし、誇りを持っている。」

さまざまな課題があるにしろ(それはどんな分野の職業でもそうです)、僕たちはまず、自分たちが食べているものを作る農家=百姓のことをきちんと知ることから始めることが大事なのではないかと思いました。

監督 柴田昌平



制作・著作・配給:プロダクション・エイシア  
制作協力:一般社団法人 農山漁村文化協会  
2022年 | 日本 | 130分 | カラー | DCP

柴田昌平 監督作品

作成:文化庁文化芸術振興費補助金  
(映画創造活動支援事業)  
独立行政法人日本芸術文化振興会